

# 社会福祉及び母性に関する一考察

— 働く女性と子育ての思想史を端緒として —

望 月 雅 和

## A study on social welfare and motherhood: Clues from the history of ideas about working women and childcare

Masakazu MOCHIZUKI

### Abstract

Due to historical changes such as an aging population with a low birth rate and changes in the family structure, increasing attention is being paid to childcare and nursing related to social welfare issues. In this situation, in which the numbers of working women has increased with fundamental and functional changes in the family and motherhood, "occupational segregation by gender" is being reconsidered. The concept of "motherhood" which includes the idea that mothers should raise their children has changed, and child-raising has become remarkably "socialized" and "specialized". In Japan, motherhood has also changed remarkably from an idea-historical perspective. Now, we have nursery staffs, care workers, social workers and clinical psychologists, and training of specialists in childcare and child welfare, as well as social work education, have spread to higher education.

In this study, we discuss idea-historical changes in social welfare and child-raising among working women, focusing on motherhood that is related to childcare. Our goal was to obtain ideological suggestions for related studies that are still in their infancy.

### Key words

well-being, motherhood, childcare, working women, dignity for mother and child

## 1 本研究の視座

少子高齢化、家族形成の変容により、社会福祉に関連する子育て、保育、介護などへの関心は、一層の高まりをみせている。こうした中で、働く女性が増加し、家族や母性の機能的本質的な変化、「性別職務分離 (segregation)」への再検討、及び、これまで女性に自然発生的に宿るとされて、社会福祉実践に親和的とされた「母性」に関連する子育てが、著しく「社会化」、「専門化」をしてきている。わが国でも母性の思想史的な変容は大きく、保育士、介護福祉士、社会福祉士、臨床心理士などが誕生し、子育てや社会福祉に関する専門人の育成や社会福祉専門職教育は、高等教育に波及している。社会福祉と関連する、家族や母性に焦点を当てた研究は、同時代的なアクチュアルな意義を有

している。

しかし、近年、社会福祉学体系下において出版された、母性関連の研究成果である、『社会福祉思想としての母性保護論争』において、今井小の実が指摘するように、「社会福祉における女性観は、未だ旧態依然な状況にあり、その従来のイメージを払拭できずにいる」<sup>(1)</sup> のであり、「その背景には、社会福祉が育児や介護の担い手として女性を想定しシステムに組み入れ、歴史的に性別役割分業の固定化に加担してきたことがあげられる」<sup>(2)</sup> といわれる。

子どもの生死にも関わる虐待のような臨床心理的な問題、貧困と家族など経済的な問題からも、母子関係のあり方が問われている。そして、子育て役割の前提条件として、育児は固定的に母親が無条件で担う仕事

(1) 今井小の実『社会福祉思想としての母性保護論争－“差異”をめぐる運動史－』ドメス出版, p.23, 2005.

(2) 同上

であるとして、母子のみを一義的に表象化し、子育てを規定していこうとする見識が歴史的継続的に存在している。さらに、社会福祉専門職として、職業としての福祉実践活動の高度化を図っていく上で重要なことは、古典的にはイリイチ（Ivan Illich）が指摘したように、こうした家事体系の系譜にある子育てや介護活動が、無報酬、シャドーワークとされてきたことである。社会化や専門職化した後、教育を受けて、現場で経験を積んだ後の報酬や待遇のあり方は現在に至るまで論議となり、母性の思想をどのように再定位していくかは、現実問題に直結している。

こうした関連領域について、先行研究などを俯瞰すると、一部の社会福祉研究者による先駆的な取り組みはあるが、今井が以下にレビューするように、研究を広げる余地は、いまだ大きいといえる。今井によれば、「このような女性をとりまく社会福祉の状況にあって、杉本貴代栄の研究に代表されるように、ジェンダーの視点から風穴をあけていこうという意欲的な取り組みも少しずつ生まれてきている。また社会福祉会の重鎮、五味百合子や一番ヶ瀬康子に代表される歴史的な視点から発せられた貴重な研究も残されており、継承者の林千代の業績」はあるが、「しかし社会福祉における女性の位置づけから考えれば、その研究、問題提起は少数派の域を超えていない印象をうける。それは、たとえば、社会福祉の歴史をひもとくテキストをみれば一目瞭然であろう」と論じられる<sup>(3)</sup>。例えば、母子、家族関係に起因して起こる現実の問題は深刻であるが、取り扱いが相対的に少ないのである。確かに、研究領域や社会福祉の高等教育カリキュラム編成をみても、性に根差した福祉の記述は相対的にまだ少なく、家族福祉や母子関係の問題へ焦点化した研究を、進めていく余地は大きいといえる。

近年、大きな潮流となっている、家族とジェンダー研究の成果が示唆するように、当該研究は、既存の人間観とその関係性、家族観、そして、これまで前提となってきた人間と社会の枠組み自体を問い直す視座が内包されている。西欧思想の源流であるプラトン（Plato）、アリストテレス（Aristotle）以来の世界観や人

間観について、ロゴスの再解釈という言語論的転回（linguistic turn）の論議があるように、家族や男女に関連するジェンダーの射程は、一分野のみならず既存の人間や教育観そのものを問い直す、新しい性のありようの転回（gender turn）を提供している。この視座の提起する問いは、社会福祉学、教育学、保育学、心理学、社会学はもとより、医学、経済学、文学など広範な領域を包摂し、既存の人間の社会的な前提の問い直しを促す。

こうした中、例えば、広範な学術及びその教育研究に、家族関係を含むジェンダーからの論議が増すのは自然であり、アメリカの高等教育研究学会（Association for the Study of Higher Education）の『高等教育の歴史』を評して、「ジェンダーについてはもはや圧倒的」<sup>(4)</sup>との指摘がある。また、新たな福祉社会も模索するギデنز（Anthony Giddens）による、高等教育に資するために作成された、多領域を含むテキストにおいては、親密性の問題を限定的に捉えるのではなく、それを包括的な立場から把握した上で全体の形成がなされている<sup>(5)</sup>。翻って、母性の性質へ視点を移しても、それが母親と子ども、あるいは、男性と女性の親密性や関係性という私的な領域から、これらと相関する公的な福祉制度や働く女性の分析に至るまで広範な領域に亘り、母性とその関連研究が学際的に多岐に及ぶ。

本研究は、社会福祉と親密性の思想史的な変容について、子育てや保育に関わりの深い母性に焦点をあて鳥瞰し一考察を加えることにより、いまだ萌芽的である関連研究へ、一つの示唆を得ようとするものである。

## 2 論題における思想史的方法と位相

前節で述べたように、社会福祉と母性の問題は、同時代的な意義を有する。では、過去においては、例えば、働く女性と子育ての問題は、大きな意義を持たなかったのだろうか。こうした問題は、近年に新しく生じた、新興的で突発的な問題なのだろうか。これは、後述していくように、明らかに過去から連綿として続く、史的で深刻な問題であり続けてきた。特に、わが国の戦前期、近代化を迎えて女性労働に決定的な変化

(3) 同上

(4) 坂本辰郎「アメリカにおける高等教育史研究の動向—通史編纂の問題」『「教育」を問う教育学—教育への視点とアプローチ』慶應義塾大学出版会, p.252, 2006.

(5) Giddens, A. *Sociology*, Polity Press, 2009.

がもたらされ、子育てと社会、母性の思想が、根本的に問われ続けてきた。

働く女性と母性について先鋭的批評を続けた山川菊栄は、戦前期において、働く女性と母性の批評を先駆的になし、既に「育児の社会化」の構想をしていた。近代化と結びついた良妻賢母が謳われる中で、母性を相対的に捉え、子どもと社会の福祉を論考していくことは強い批判も受け困難を極めた。今日に目を転じて、急激なイデオロギー変動とそれに伴うアイデンティティの模索の中で、新しい時代に親和的な社会福祉のあり方、新しい家族観や子育て、保育のあり方の模索が続いている。

アメリカの歴史家、グラック (Calol Gluck) は、「歴史としての現在」(The Past in the Present)<sup>(6)</sup> という論文を執筆している。わが国の敗戦の瞬間、過去から未来へと、これまでの状況が記憶として刻み込まれ (inscribed in Japanese memory)<sup>(7)</sup>、新しい世界へと向かおうとしたのだが、過去という桎梏から逃れられない様相が論述される。「戦後」の日本が、戦前と調和的な関係がなされず、精神的にも整理されず、敗戦直後の「戦後」が非常に長く続き、現在にまで波及している様相が洞察されている。つまり、ここでの「現在」とは、世界大戦敗戦直後、アメリカの強烈な影響を受けて、家族や社会保障体制が激変した1945年当時を指すと共に、グラックが指摘する「長い戦後」と述べるような、60年以上経った今日までを包含する「現在」なのであり、「公共の記憶」(public memory)<sup>(8)</sup>、公共性<sup>(9)</sup>の全体を包摂する現在である。

本論考では、現在の思想状況を探る上で、社会福祉と母性の思想史的方法を採用しつつ、今日の新しいパラダイムの示唆を得たい。働く女性と母性への変異に注目し、思想史的な論考により、それら変遷を記述しようとする。

例えば、戦前日本において、家父長制の下、子育てと近代的な労働を主に担ってきた女性が、国家主義の

高揚から、母性、子育てがより強く統制され、過酷で陰惨な現場へと駆り立てられてきた史実がある。敗戦後は、新しい労働や家族観、子ども観の影響を強く受けつつ、男女同権が模索されて家族や母性のあり方に変化が生じ、思想的な変容を経て70年代の女性解放運動が興ったが、現今、改めて家族の親密性や子育て観の社会的な問い直しがなされている。本研究では、このような史的な流れを鳥瞰できる思想史的方法を用いて、変容過程を論考していく。

### 3 本研究に関連する母性の思想史への射程

わが国の社会福祉研究及び、社会福祉専門職教育において、史的な研究から大きな役割を担ってきた吉田久一は、「日常性や行政論の濃厚な社会福祉研究は、たえず行政や日常サービス追従の危険の中に置かれている。時の政治や行政に引きずられがちな社会福祉に対し、理論的歯止めこそ、優れた社会福祉理論に期待されるものである」<sup>(10)</sup>と指摘し、社会福祉を考える際、「歴史的社会的実践」の重要性を強調している。社会的な変動から、社会福祉や保育の研究自体への関心は高まっているが、吉田が指摘するように、同時代的な日常性や行政からの需要が非常に強いものについて、歴史的相対的に問題を把握し、史的時間的な観点から原理や実践を論及する意義はある。

わが国の教育や保育の思想において、歴史的意義を有してきたデューイ (John Dewey) は、子どもと社会を調和的に捉え、『学校と社会』(1899)を著し、『民主主義と教育』(1916)、『共同の信仰』(1934)など様々な著作を通して、私的な事柄と社会的な事柄を対立的に捉えるのではなく、それを包括的に捉える教育思想を模索し開陳していた。今日、旧来の二元論的な思想で、子どもと社会を分断的に捉えることはできない。こうした状況の中で、例えば、デューイ関連研究であれば、デューイ研究センター<sup>(11)</sup>のヒックマン (Larry Hickman) の仕事<sup>(12)</sup>などに影響をうけた、杉浦宏編集

(6) Gluck, C. The Present in The Past, Gordon, A. ed., *Postwar Japan As History*, University of California Press, pp.64-95, 1993.

(7) *Ibid.*, p.64.

(8) *Ibid.*, p.65.

(9) 先駆的にはアーレントなどにより論及されており、今日では社会福祉とも相関的に論じられる (cf. Arendt, H. *The Human Condition*, University of Chicago Press, 1958. 塩野谷祐一・鈴木興太郎・後藤玲子編『福祉の公共哲学』東京大学出版会, 2004).

(10) 吉田久一『日本社会事業の歴史』勁草書房, p.4, 1994.

(11) The Center for Dewey Studies at Southern Illinois University (<http://www.siu.edu/~deweyctr/index.htm>)

(12) Hickman, L. *Reading Dewey: Interpretations for a Postmodern Generation*, Indiana Univ Press, 1998.

による『現代デューイ思想の再評価』の研究等によって再評価される気運もあるが、教育と社会の思想が改めて再考されて希求されている。

近年のプライベートな社会福祉問題の「社会化」の流れがより強まるに伴い、子育てや母性を考える際、子育てを母親にのみ帰属させるという母性の思想を、どう捉え直していくかが改めて問われている。ただし、家族や母性の史的な経緯が示唆するように、直接に子どもに触れ合う母性は、優れて私的で精神的なものでありつつも、公的な思潮に強い影響を受けるものでもあり、容易に整理ができるものではない。

近代日本に視点を移せば、女性の精神に本質的に宿るとされた子育て適性としての母性は、富国強兵的な社会施策としての女性労働参加へと結びつき、一時は歴史的で豊穡な「母性保護論争」を生み出しつつも、結局はナショナリズムの体制の中へと巻き込まれていった（母性保護論争の原資料は、香内信子編集/解説『母性保護論争』）。

ただし、母性保護論争の論客でもあった山川菊栄に象徴されるように、女性の立場として自律的批判的に働く女性と母性の思考を展開し続け、敗戦後には完全な在野の立場から、労働省婦人少年局の責任者としてその働く女性と母性思想を、実際の子育てや職場の環境整備へと社会的な強い影響を与えるに至ったという系譜もある。

さらに、敗戦後に家族観や母性観に影響を与えた者として、アメリカのミルズカレッジを卒業後、GHQの民生局にいた、ベアテ（Beate Sirota Gordon）がいる。彼女は、日本国憲法の男女平等規定により家族形成に強い変容をもたらし、その後のわが国の行方に影響を与えた。この軌跡を論じたものとして、例えば、ベアテの自伝でもある『1945年のクリスマス—日本国憲法に「男女平等」を書いた女性の自伝（*The Only Woman in the Room: A Memoir*）』がある。こうした流れはさらに時を経て、1970年代、フリーダン（Betty Friedan）の『新しい女性の創造』にあるような女性観も紹介されるに至り、戦前期にみられるような家族や母性が、大きな変容をみることになる。

しかし、この母性思想の変化は、単純な新しい戦後

思想の受容でもない。山川菊栄が戦前期から戦後期に、一貫して働く女性と母性のあり方を思考し続けたように、戦前から継続展開的に、働く女性と母性観及び子育ての思想が発現していった。そして、重要なことは、実際の子どもや母親の陰惨な現状の中から、その思想が形成され、やがて行政にまで至ったことである。

近代化の中で取り残され、両親のいない子どもについて、戦前期の山川は文章を残している。その冒頭において、「捨児、捨児、昨日も捨児、今日も捨児。昨日の新聞を賑わすものはあとからあとから暴露される政党の醜事件と捨児の記事である。濡れ手で粟の譬えものかは、遊郭の移転土地の買い上げ等に際し、居ながら舌一枚動かすだけで数十万、数百万のアブク銭をせしめる政党または政党员があるかと思えば、血の汗を流すほどの労働をしてさえも、子供一人、養えぬ親がある！」<sup>(13)</sup>と述べ、家族と子どもの現状を真摯にみつめた論考を残している。

以下において、戦前期の近代と母性の様相について、さらに論を進めていく。

#### 4 近代における働く女性と母性—戦時下における国家と母性の相克—

急激な近代化や産業化は、国家を中心とした施策としての女性労働の喚起を進め、家族や母性思想の変容を迫ったが、そこには、子どもや母親の社会福祉及び尊厳という視座は、相対的にあまりに欠落していた。母子関係中心の子育て観の当時においても、母親が存在せず、さらには両親を共に失った子ども達もおり、豊かな母子関係を築くことはそもそも不可能な状況の中で、著しい不利益を経済的のみならず精神的にも被った。

ただし、こうしたある種のナショナリズムの時代にあっても、直接に子どもに触れ合い、私的な立場からも社会福祉や子育てを進めようという動きもあった。山川菊栄及び夫の均と岡山の地を通して関係のあった石井十次は、岡山孤児院の設立によって、わが国の児童福祉の一つの起源とも言われる潮流をつくった。石井は、キリスト教とルソー（Jean-Jacques Rousseau）やペスタロッチ（Johann Heinrich Pestalozzi）の思想など

(13) 山川菊栄「捨児」『山川菊栄集4』岩波書店, p.167, 1982a.

により、自律した子育て思想を生成した<sup>(14)</sup>。さらに、当時の社会的及び福祉経営的な観点から見たとき、特に注目される者が、石井と極めて親密な関係のあった大原孫三郎である。

大原孫三郎は実業家であったが、石井の影響も受け、人道的な活動を強く希求していた。そして、岡山孤児院と石井に、多額の資金援助をすることになる。近年、兼田麗子などの研究者により、大原の当時の活動が、福祉社会をつくる先駆的な活動になっているとの再評価がなされるが、当時の石井や大原の活動は、子どもと社会、家族と社会福祉を考える上でも実に示唆的である。

大原は、石井の岡山孤児院の直接の運営に関わるのみならず、倉敷労働科学研究所（後の労働科学研究所）の設立に関わり、そこでは、当時の働く女性と母性、子育てのあり方の先駆的な研究がなされてきた。筆者は、当時の労働科学研究所に保存された母性や子育ての原資料を、労働省婦人少年局関係者と史料編纂に従事し、成果として『戦前婦人労働論文資料集成』<sup>(15)</sup>を刊行している。

ただし、石井や大原の活動は、先駆的な福祉社会、公共性のあり方を模索するものとして評価されるが、当時のナショナリズム的な風潮の前に、著しい制約状況にあったことも重要な視点である。もし、こうした子どもと社会事業の実践活動に、国家がより親和的であったら、さらに多大な社会福祉の成果となりえたであろう。

そもそも、戦前、そして、戦後から現在に至るまで関心を引き続けるナショナリズムとは、国家を通して、そこに属する家族や母子関係にまで影響を与え、さらには、その国民の生死にまで及ぶ可能性がある概念である。山影進は、「ナショナリズムは、近代という個人の基本的な人権を擁護する原理を追及する時代にあつて、個人の生命よりも尊い価値、個人の生命を犠牲にしてまで守るべき価値が国家にあると思わせるほど、個々

人に訴えかける力さえ持っている。否、ここにこそ、ナショナリズムの特質を見出すことができよう」<sup>(16)</sup>と洞察している。

他方、ナショナリズムの理論的構築は困難を極めており、「次から次へと提唱されてきたナショナリズム論は、いずれも過去の理論が問題の核心をついていないという批判から始まっている」<sup>(17)</sup>と指摘されるほど、その基礎づけ（foundation）を得るのは難しい。こうした中、国家主義論への新たな注目に貢献した、アンダーソン（Benedict Anderson）による『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』<sup>(18)</sup>、あるいは、政治的な単位と文化的な単位、産業化とナショナリズムへの視角をもったゲルナー（Ernest Gellner）による『民族とナショナリズム』<sup>(19)</sup>といった古典的な研究も存在する。

そして、いまだに多様な視角からのナショナリズム論が批評され続けているが、ナショナリズムという議論が不毛であるなどということでは決してない。むしろ、「国民統合と分裂の研究は、決して新しい分野ではない。しかし、理論的にも、実証的にも、広大なフロンティアが目の前に開けている」<sup>(20)</sup>と解すべきであり、「個人の生命の犠牲」まで強いる国家主義の力への関心は、社会福祉の基本ともいえる人権、生命の尊厳を考える上でも、意義を持ち続けているといえよう。

今日、男女共同参画社会基本法などにより、国家にとっても、男女間の家族形成や子育ての意義が高まっている。さらに、冷戦崩壊により社会思想は大きく変容しつつあり、国家像や家族像の再評価が問われている。

わが国においては、明治期以降、それまでの封建的国家に替わって、近代的な国家建設がなされていった。しかし、ここで注意すべきことは、その現出が創造的に生まれてきたというより、他国を範（model）として近代化が進められていったということである。すなわち、「日本における近代化は東アジア世界から離脱し、西洋文明を導入するという形で自覚されたため、伝統

(14) 石井十次と岡山孤児院については、ルソーやペスタロッチ、ミュラー（George Muller）などの思想の影響に加えて、大原孫三郎との関係に至るまで精緻な研究がある（e.g. 細井勇『石井十次と岡山孤児院—近代日本と慈善事業—』ミネルヴァ書房, 2009）。

(15) 望月雅和・福沢恵子編集/解説、赤松良子・原田冴子監修『戦前婦人労働論文資料集成（第四巻）』クレス出版, 2001。

(16) 山影進『対立と共存の国際理論—国民国家体系のゆくえ—』東京大学出版会, p.227, 1994。

(17) 同上, p.229。

(18) Anderson, B. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Verso, 1983。

(19) Gellner, E. *Nations and Nationalism*, Cornell University Press, 1983。

(20) 山影, 前掲書, p.249。

社会と近代社会との関係は東洋と西洋の空間的問題」<sup>(21)</sup>とされたのであり、わが国の近代化とは、西欧文明の受容が一つの方向となっている。つまり、先進の欧米に対し、後発の日本が追いつき近代化をしていくという構図である。こうして、近代の日本は、国力の増強、産業化が急激に進められていき、いわゆる、明治前期から開始された殖産興業政策が推し進められて、働く女性と母性は、格別な意味をもってきた。

したがって、欧米の源流にあるような近代化の史的進行、例えば、ルネサンス及び宗教改革を経て、フランス革命、産業革命へと至るようなものとは、日本の近代化は異なる。日本においては、他の先進国家による、近代産業技術の導入といった他国に習う形で、自国の殖産興業、賃労働の拡大をしていった。

ところで、維新以後、わが国に流入してきた西欧思想は、そもそも起源的に家族観や私的なものと公的なもの、公／私の区分をどう捉えていたか。これには、今日の公共圏論の思想の端緒ともいえる、ハーバーマスやアレントが共に、その思想的起源に古代ギリシャまで遡って議論をしている。

ハーバーマスが公共圏論を著した動機に触れつつ、花田達朗は以下のようにまとめている。花田は、「彼は公的なものと私的なものの区別と両者の関係について論じ始めるにあたって、アレント (Hannah Arendt) の『人間の条件』を引用しつつ、ギリシャのモデルをその起源とする。ギリシャの都市国家では、ポリス (Polis) の圏とオイコス (Oikos, 家) の圏は峻別されていた。前者は自由な市民の共同の領域であり、後者は個々人に属する領域である」と指摘する。さらに、ポリスとオイコスについて、「前者、つまり公的生活のための上演舞台としてはアゴラ (agora) が用意され、それが後者の場に踏み込むことはない。前者における公共圏は対話 (lexis) と共同行為 (praxis) から構成される」<sup>(22)</sup>と論述される。

ここで、特に家族や母性のあり方を問う際に重要なことは、ポリスへ参画すること、すなわち、アレテ (arete) を内在し、政治へと参加が許されるのは、主に

成人男性が想定されていることである。つまり、男はポリスへの参画、公共圏、政治、国家等を担い、女はオイコスたる私事圏を主に担う。ここでは、子育てや介護に連関する私的領域としての社会福祉関連活動は、女性が担う仕事であるといった、分離的、性に根ざした固定的な役割分担が示唆される。

さて、西欧思想が急速に受容された日本近代期を見ると、ゲルナーが国家の産業化がナショナリズムと癒着しつつ現れると論じたように、わが国でも明治維新以後、当時の西欧システムの流入の中で、それが政治経済的に出現する動態が現れた。戦後、男女雇用機会均等法の制定に関係した赤松良子が述べるように、「日本が近代国家となり、そして工業化への歩みをはじめてふみ出した時、すでに女性は賃労働者として出現してきた。以来今日まで、大勢の女性が、あるいは工女または女工とよばれ、あるいは職業婦人とよばれて働いてきた」<sup>(23)</sup>という解釈もできる。日本における急速な近代化は、女性の働き方に大きな変革をもたらし、そこに、女性労働の史的源流をみることができよう。

上記の流れを踏まえた上で、当時の女性労働者の状態とは、どのようなものであっただろうか。近代化における労働場面の実態としては、近代化に伴う産業革命期にも見られたように、急激な資本主義化によって、働く女性と子育ての様相が過剰に逼迫していく動態がある。ジェンダーの視座でみれば、決して男女が平等で、対等な権利行使による仕事が生まれたのではなく、すぐれて近代国家の都合により、女性労働が国家貢献の手段化していったものに他ならない。経済的な自由放任の政策が、大河内一男などが述べる「原生的労働関係」を生み出し、企業による放任的な余剰価値追求により、長時間労働や低賃金労働等という労働者の酷使を招いていく。産業殖産という国家体制の下、「社会は婦人労働者なくして存立しなかったのだが、その大多数は低賃金階層から浮かび上がることはなかった」<sup>(24)</sup>と階層的洞察がなされるように、女性労働者の逼迫化へと繋がっていく。

このような原始的な資本主義に対して、産業革命後

(21) 米谷匡史「近代化 modernization」『岩波哲学・思想事典』岩波書店, p.369, 1998.

(22) 花田達朗『公共圏という名の社会空間』木鐸社, p.27, 1996.

(23) 赤松良子, 編集・解説『日本婦人問題資料集成 第3巻 (労働)』ドメス出版, p.1, 1981.

(24) 同上

に各国で誕生していった社会政策法が、工場法 (factory act) であった。産業場面を対象とした法として、労働者を「保護」していく法制が誕生する。わが国で制定されたのは、1911年であり、1916年の施行である。

政府が工場法の制定に着手したのは、1882年のことである。政府は、先進国で興った資本主義経済導入による労働者の状況に関連し、1898年には工場法案を作成している。しかし、当時、工場法制定は従来の労働関係を崩し、工業の発展を阻害すると強行に反対される。このため上程されることはなかったのである。こうした経過からも分るように、当時の使用者側は、今日の観点からみれば、最低限の労働者保護策にも反対して状況は陰惨であった。

さらに、今日の政策と比べて、当時の社会政策理論が、労働者の尊厳擁護や福利を増進するといった性質ではなく、「その『本質』は、労働力を保全し資本主義的経済を順調に存続し発展させるために、総資本がおこなう『合理的手段の体系』」<sup>(25)</sup>と、大沢真理が批判する通り、困難な状況で成立した労働者保護法制もまた問題を孕んでいた。ただし、社会政策が、原始的な資本主義体制で酷使されていた労働者にとって、無意味であるということではない。より本質的に捉えるとき、日本近代期において、国家の資本主義化、殖産化という全体の利益が、労働者の個別的利益を遥かに優越していたという歴史的事実が重要なのである。

このような近代国家の特殊性に直接連動して、明治期以降の殖産興業化は、働く女性や母性に対して強い影響を与えていくことになる。産業革命期に成立した大工場は、女性が大量生産をすることを可能としていった。そこで国是としての殖産化のため、女性の労働力へと焦点が当たられていくことになる。

女性労働と家族の近代化について、竹中恵美子によれば、「女子労働は産業革命による機械制大工業の成立によって、決定的な重要性をもつこととなった。その理由は、第1に機械が熟練や体力を不要にしていたこと、第2に女子の賃金が男子に比べて低いこと、第3に家族の困窮が賃労働化を余儀なくしたこと」<sup>(26)</sup>と、

整理している。

要するに、国家の近代化は、産業化を促し、子どもの教育を固定的に司るとされる母性の役割を重大化していった。近代の国家と家族との結びつきは、政府が殖産興業をなしていく中で、国民と国家を一致させる nation-state との強い連動をもって捉えられる。

ただし、本節の冒頭でも触れたように、こうした時期に児童福祉の源流ともいえる石井十次の岡山孤児院が誕生し、あるいは、岡山孤児院の援助と運営、企業の立場から福祉社会の構想をした先駆ともいえる大原孫三郎がおり、さらに、当時から「育児の社会化」を強く希求した山川菊栄による働く女性と母性の思想などは、戦前期の思潮の中でも歴史的な意義を有している。

しかし、広い意味での人間と社会福祉状況は明らかに陰惨であり、吉田久一が、広く社会事業及び社会福祉史の文献を渉猟しながら、戦時生活と厚生事業について、「戦力増強の上からいって、人的資源の保護育成は至上命題であった。しかし、戦争は、必然的に国民生活の低下を招く。この矛盾の中に於かれた戦時生活とは、すでに被救護者の生活や、賃上げにみられるような生活ではなく、優れて国民経済と関係する生活である」<sup>(27)</sup>という史観は無視できない。

さらに、子どもの社会福祉や母性に関連するものとして、吉田は、1941年の全国児童愛護実施要綱の「母性並びに妊産婦保護の徹底を図ること」などを示し、「人的資源的発想の『児童愛護』は、社会事業的な『児童保護』とは異なり、国家全体の問題に拡大すると同時に、人的な『資源』とみなされ、社会的視点や人権の視点は脱落した。児童愛護の対象規定は『育成対象』であり、対策にはパターンリズムや精神性の濃厚な『愛護』が使用された」<sup>(28)</sup>と論述している。

近代日本国家が、戦争などにより集団の凝集性が高まる中において、家庭の基盤の重視、育児を司る母性への固定的な視点があつたことから分かるように、私的で身近な子どもと母親の触れ合いなどの様相が、国力を増進していく公的運動と相関性を有して把握さ

(25) 大沢真理「日本の社会科学とジェンダー—社会政策論と労働研究の系譜にそくして—」原ひろ子・丸山真人・大沢真理・山本泰編『ライブラリ相関社会科学2 ジェンダー』新世社, p.10, 1994.

(26) 竹内美恵子「女子労働」『経済学辞典』岩波書店, p.721, 2000.

(27) 吉田, 前掲書, p.155.

(28) 同上, p.157.

れた。こうした史的な流れは、同時代的な社会福祉及び働く女性と母性を考える上でも、安易に忘却されるべきものではない。

## 5 社会福祉及び母性をめぐる思想史論考

社会福祉と子どもの思想史的な流れを俯瞰し、特に現代における包括的な研究の視座をみようとすることは安易にできないが、例えば、辻村泰男が1970年代に『児童福祉学』<sup>(29)</sup>を著して現代的な児童福祉学を構想し、2002年には網野武博が、『児童福祉学』を著した研究成果がある。網野はその論述の終わりで、子育てと母性について、以下のように述べる。すなわち、「今や、子育ての社会化は、子育て支援という観点を超えて、より積極的に子育てへの参画という観点を包含する必要がある。母性神話と保育との関係にみられる自助か公助かの対峙、対立の時期はもう既に終わっている」<sup>(30)</sup>との指摘である。

ここで網野が使う母性神話の用語は、子育てや育児ストレスなど母子に関わる臨床的、実践的な活動を続け、数十年に亘り母性の心理学研究を続けた大日向雅美によって強く主張されてきた。大日向は、1970年代前半、コインロッカーを子どもの捨て場とした、乳幼児殺人に影響を受けた。今日、孤児や母子家庭などと共に、緊急課題といえる児童虐待の問題も、社会福祉の重要な課題となっている。母性及び働く女性をどのように捉えるかは、社会的個人的な社会福祉援助の設計思想へも大きな影響を与えよう<sup>(31)</sup>。

前章では、近代化と働く女性の母性が緊密な相関を有することを思想史的に捉えてきた。そこでは、私的な子育てに関する母性が、公的な国家的施策へと強制的に巻き込まれていく中で、社会批判的な視座が生み出される淵源について論述された。国家的な「保護」法制となる、1911年の工場法規定による保護が、当時の悲惨な原生的労働状態の中で生まれた。しかし、権力の最高規範である明治憲法は、女性の権利を謳っておらず、女性の保護策は、強まっていくナショナリズムへと結びつくことになる。それは、マクロな国民国家

という立場において、国力増進の手段としての性と権力の相克の中で、「保護」法制という名目で、統制がおこなわれていった。では、この大戦後に、アメリカを中心とした連合国の占領下を経て展開していく、社会福祉と新しい家族の軌跡を、現代的にはいかに把持していけばよいだろうか。

敗戦後、戦前日本の国家主義が自覚されていくのは、極めて早い。戦後の政治思想史に決定的な影響を及ぼした丸山真男は、1946年5月号の『世界』に、「日本軍国主義に終止符が打たれた八・一五の日はまた同時に、超国家主義の全体系の基盤たる国家がその絶対性を喪失し、今や初めて自由なる主体となった日本国民にその運命を委ねた日でもあったのである」<sup>(32)</sup>と述べている。

こうした変革は、無論、知識人の思考に留まらず、具体的に、日本政府、法制、社会福祉に及んでいくことになる。連合軍最高司令部の司令官マッカーサー(Douglas MacArthur)は、五大改革(参政権賦与による婦人解放、労働者の団結権、教育の自由主義化、専制政治の廃止、経済の民主化)を指示する。このように、「五大改革指令のトップに婦人の選挙権が挙げられている」<sup>(33)</sup>のであり、敗戦後の体制変革によって、家族形成の思想は大きな変動が起こることになる。

まず、劇的な変化として、女性の権利が明示されていったことが挙げられる。法的には、憲法第14条、24条に、明確に男女平等が記された。例えば、第24条には、「夫婦が同等の権利を有する」、「個人の尊厳と両性の本質的平等に立脚し」等の語句がある。そして、重要なことは、独立した働く女性を扱うわが国の唯一の政府機関としての意義をもつことになる、労働省婦人少年局が誕生したのが1947年であり、戦前期に先鋭的な母性及び子育て思想を展開していた山川菊栄が着任する。

終戦後、社会福祉研究に史的な足跡を残した一番ヶ瀬康子は、労働省婦人少年局で仕事に携っていた。この職場の専属の職員になることを強く望んでいた一番ヶ瀬は、山川に強くそれを主張するが採用には至らず、その後に社会福祉研究へと進むことになる。一番ヶ瀬

(29) 辻村泰男『児童福祉学』光生館, 1970.

(30) 網野武博『児童福祉学<子ども主体への学際的アプローチ>』中央法規, p.301, 2002.

(31) 大日向雅美研究室 (<http://www5a.biglobe.ne.jp/~mohinata/>)

(32) 丸山真男「超国家主義の論理と心理」『丸山真男全集 第三巻』岩波書店, p.36, 1995.

(33) 西清子『占領下の日本婦人政策－その歴史と証言－』ドメス出版, p.14, 1985.



は山川の思想を高く評価しており、「近代日本のおそらく最高の女性思想家であり理論家」と述べ回顧している<sup>(34)</sup>。

さて、ここでの解釈に注意が必要なのは、女性の権利の保障、政府の独立した機関（労働省婦人少年局）の設立がされて直ちに、現代的な社会福祉において不可欠ともいえる、働く女性や子どもの権利が実際に具現化したということには、決してならないという点である。

この点に関して、興味深い指摘が、憲法24条制定時に深く関わったGHQ民生局員、ベアテの最近の言葉にある。ベアテによれば、1946年3月4日、憲法草案のために極秘の会議がGHQ民生局の運営委員会と日本政府代表との間でもたれことについて、次のような指摘をしている。「私の記憶に強く残っているのは、この極秘の会議に参加した日本政府の代表者が、『男女平等』について強く反対していたことです」<sup>(35)</sup>。帝国憲法改正の際の言説としては、例えば、以下のものが残されている。すなわち、帝国憲法改正小委員会秘密議事録の北れい吉の次の文言、「性的ニ墮落スル女ハ全人格ガ墮落シ易イ、男ハ性的生活ハ末梢的生活デアル、性的ニ少々汚レテ居テモ人格ハ墮落シテオラヌ」<sup>(36)</sup>がある。

さらに、ここで興味深いのは、家族と性に関連する仕事の役割が、表層にある法律的な権利を超えて、個人の明確な信念や思想として語られていることである。これは、働く女性と母性の思想把握に直接に関わる。

帝国憲法改正案審議会議録には、三浦寅之助の以下の言葉、「併シナガラ男女平等ト申シ同権デハアリマスケレドモ、一ツノ家庭ニ於キマシテハ各々其ノ職分ガアルト存ジマス、女ハ家庭内ニ於テノ主婦トシテノ仕事ガアル、男ハ男トシテノヤハリ仕事ガアル、デアルカラ私ハ家庭ノ分野ニ於テ各々一家ヲ維持スル点ニ於テモ、オ互ヒニ其ノ立場タ々ヲ守ルベキデアルト思ヒマ

スルシ、又サウシタ所デ決シテ男女平等ヲ阻碍スルモノデモナイト信ジテ居リマス」<sup>(37)</sup>が残存している。さらに、「日本ノ伝統的立場カラ申シマシテモ、日本ガ家族制度ノ国デアリマシテ、是カラ総テノ我我日本国民ノ生活ノ基礎ガ出テ居ルノデハナイカト考ヘテ居ルノデアリマス、併シ此ノ草案カラ見マシテ、家族制度ト云フモノガ果シテ維持サレルカドウカト云フコトニ付キマシテハ、相当ノ疑ヒヲ持タザルヲ得ナイノデアリマス」<sup>(38)</sup>と論述される。

上記のような言説は、丸山真男の指摘である、「国民の政治意識の今日見らるる如き低さを規定したものは、決して単なる外部的な権力組織だけではない。そうした機構に浸透して、国民の心理的傾向なり行動なりを一定の溝に流し込むところの心理的な強制力が問題なのである」<sup>(39)</sup>を想起させる。特に、母性の思想は、働く女性と子育て、家族といった私的な問題に大きな関わりがあり、その概念がわが国に誕生する近代期から「論争」を生み出し続けた。制度的には戦後直後より旧体制の喪失をして新しい体制を手に入れたが、その思想がすぐ受容されて具現化していくものではなかった<sup>(40)</sup>。むしろその喪失と共に、新しい家族の思想や精神性が問われてくる。

さて、わが国の近現代の思想史の中で、「母性」の概念の誕生に強い影響を与え、原初的で源泉的な論争といわれるものが、母性保護論争であった。これは、1918年～1919年におこなわれ、史的な足跡を残した論者である、平塚らいてう、与謝野晶子、山川菊栄、山田わかによって、論争がなされた。現在、子育てのあり方は、育児の社会化など、国家的な論議へと波及しているが、子どもと社会を含める深い洞察に満ちたものとして、歴史的な評価を得た論争である。

わが国の児童福祉や教育、そして「母性」の概念形成へと影響を与えたケイ（Ellen Korolina Sofia Key）に

(34) 一番ヶ瀬康子「三度の出会い（『山川菊栄集7・月報』）『山川菊栄集7』岩波書店、p.6、1982b.

(35) 「文京女子大学開学10周年記念特別講演会」『文京女子大学総合研究所紀要』創刊号、p.6、2001.

(36) 帝国憲法改正案審議会議録1946年7月29日第4回小委員会

([http://www.shugiin.go.jp/itdb\\_kenpou.nsf/html/kenpou/seikengikai/seikengikai.htm](http://www.shugiin.go.jp/itdb_kenpou.nsf/html/kenpou/seikengikai/seikengikai.htm))

(37) 帝国憲法改正案審議会議録1946年7月5日第6回委員会

([http://www.shugiin.go.jp/itdb\\_kenpou.nsf/html/kenpou/seikengikai/seikengikai.htm](http://www.shugiin.go.jp/itdb_kenpou.nsf/html/kenpou/seikengikai/seikengikai.htm))

(38) 同上

(39) 丸山、前掲書、p.18.

(40) 今日、日本の戦前期と戦後期の通史的に捉える意義が指摘されてきている（e.g. Gordon ed., *op.cit.*）。

よる『母性の復興 (The Renaissance of Motherhood)』は、そもそも平塚らいてうなどにより翻訳されて紹介されたのが、源流の一つといえる。そして、らいてうや山田わか、ケイに強い影響を受けていた。母性を強調する思想は、こうした海外との思想交流を経て母性保護論争の全体にも波及する。働く女性と子育てについて、鋭い対決の中で母性概念の生成が模索されたのである。

女性の精神に内在する母性を強調したらいてうに對し、与謝野晶子は、「女子の徹底的な独立」<sup>(41)</sup>を述べてらいてうの言説を強く批判した。さらに、その両者を整理しつつ、包括的に働く女性と母性を把握しようと論じたのが山川であった。広い視野から母親や子どもを見つめ、当時の論争の時点で既に「育児の社会化」を構想した山川の視点は、思想的にも先駆といえよう。ただし、この論争を、表層的な論者の整理に留め、優劣をつけるのは、深層にある母親と子どもへの豊穡な各自の思想を捨象しかねない。

そもそも、近年、男性と女性を見つめる思想はより深化し、一層の多様性を帯びている。それは、男性と女性を規定してきたジェンダー (gender) の定義それ自体に及ぶものであり、生物学的性 (sex) に対置する、社会的性と定義をする前提条件に男性／女性という固定的な二分法が内在され、生物学的であろうと社会的であろうと、前提として内在する二元的世界観自体への問い直しがある。近年、活発になってきた、バトラー (Judith P. Butler) などによるジェンダー観の再解釈のように、性の様相をある種の運動の中で、performativeな視点からみる問題が論及されている。

本論文がこれまで述べてきたように、戦前期の働く女性と母性、子育てが、強い統制を受けて歪められてきた史実にあるように、山川がなしたような、ラディカルな視点は重要である。これは、社会福祉史の立場から、吉田久一が、戦前の児童愛護や母性保護の施策を、自律的批判的に論じたことでもある。さらに、戦前期から山川は、「フェミニズムの検討」で鋭く批評したように、特定の性の立場を固定化して宣揚したり、無定見な批判を繰り返したりすることに、極めて慎重

であった。特定の集団のみを是とし、相手にレッテルを貼って攻撃するというようなドグマは批判された。山川は、固定のイデオロギーのみで見るといよりも、生活の中から紡ぎだされる言説としても解釈が可能なように、生活や現実根ざした、冷静なクリティークがそこにあった。これは、本論で述べられるような、私的な子育てや母性へ関連する言説を解釈しようとする際に重要である。

このような言説主体それ自体まで翻り反省的に再解釈しようとする態度、メタフィジックな問いかけは、例えば、フレイザー (Nancy Fraser) によりなされている。女性に関連する運動を進める際に主張される「対抗言説 (oppositional discourse)」というものが、確定的に「専門家言説 (expert discourse)」へと結び付けられ、結局は「再私的化言説 (reprivatizing discourse)」へと固定的に再帰する動態を指摘し、現代的な運動の本質的希求というものを、「多元的／論戦的 (multivalent and contested)」な視座へと転換的に捉えている。ここでは、今日の思想状況を踏まえ、改めて批判ということ問い直し (What's Critical about Critical Theory?)、これを福祉と女性 (Women, Welfare, and the Politics of Need Interpretation) というトピックにも連関させ考究している<sup>(42)</sup>。提起されるような問題は、社会福祉や教育に関する運動や論争を解釈する際にも重要であり、特定の言説や集団が、二元論的世界観の中で原理主義になるとき、ある種のゲットー化を促し、排他的かつ孤立的に陥ることへの警句とも取れる。

こうした見方は、母性の概念生成の源泉的論争であった、母性保護論争を解釈する際に、重要な示唆を与える。そもそも、論者の対立的な側面が強調されがちであるが、ニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche) のわが国への紹介者としても知られる生田長江などによる閨秀文学会に、与謝野晶子、平塚らいてう、山川菊栄は参加して共に学び、思想的な交流があった。確かに、表面的には、子育てや母性観に大きな違いがあるように見えるが、らいてうや晶子を厳しく批判した山川が、同時に二人へ深い尊敬の念を示し、むしろ安易な批判を戒めているように、少なくともドグマ的な対

(41) 与謝野晶子「女子の徹底した独立<紫影録 (抄)>」香内信子編集/解説『母性保護論争』ドメス出版, pp.85-86, 1984.

(42) Fraser, N. *Unruly Practices: Power, Discourse and Gender in Contemporary Social Theory*, University of Minnesota Press and Polity Press, 1989.

立を助長するようなものではなかった。

例えば、晶子の母性や子育て観を見ると、今日、重要になっている育児の政策的社会的な支援という見地からは、一見すると「女子の徹底的な独立」の主張は、アナクロニズムに見える。しかし、近年、社会福祉や教育研究者からも晶子に高い評価が寄せられるように<sup>(43)</sup>、エロスと子育てを調和して把握し、徹底的に子育てにおける権力や強制力を拒否して警戒する自律的な態度は、予見的でさえある。

そして、山川は、こうした晶子の一側面は評価していたのである。ただし、より広い社会の福祉という視座、つまりあらゆる母親と子どもを想定した経済的社会的な視野に立ったとき、自立できない者がでることに山川は強い憂慮を示した。こうした冷徹な整理を見誤って、表面的な批判のみで整理をしていこうとする時、お互いが特定の母性観や子育て観に固執して対立しているだけのような印象を抱きかねない。

さらに、育児支援に対する「社会」の視点を重視した山川を評価する際、無機的に制度や社会政策のみを扱ったのではなく、その前提として深い人間の精神への眼差しがあったということにも注意が求められる。吉田久一は、歴史的な論評ができる社会福祉の論者は少ないと述べつつ、大河内一男の「我国に於ける社会事業の現在及び将来」を組上に載せているが<sup>(44)</sup>、確かに、マクロな社会政策に対する検討は、社会福祉研究の深化においても重要である。この点は前節で論述した、戦前期の社会政策の不備による働く女性と母性の悲惨な状況を考えても、さらに、山川のような社会科学的な思考の意義を考えても十分に理解ができる。

しかし、家族など男女観や母性の思想を考える上で、ケイの母子の思想に大きな影響を受けて、平塚らいてうや山田わかが精神的な次元も踏まえ母性保護論争を

深めたように、社会科学的な思考を強調して論じていた山川にも、他方で、カーペンター（Edward Carpenter）のような内面的精神への深い洞察に満ちていた。山川は、男女の新しい愛の形を希求した『恋愛論（Love's Coming-of-Age）』を翻訳し出版をしていた。さらに、今日はほとんど言及されることがないが、先駆的に精神とセクシュアリティへの深い洞察を見せたものに、山川の翻訳による『中性論（The Intermediate Sex）』<sup>(45)</sup>がある。ケンブリッジのフェローを経て、深い内省を続けていたカーペンターは、ホイットマン（Walt Whitman）の『草の葉（Leaves of Grass）』などに強い影響を受けて直接に親密な交流をもち、男性と女性に内在する精神の規範を問い直し、精神における中性的な役割を創造的に考究した。ホイットマンは、夏目漱石などを通してわが国にも紹介されたが、transcendentalismはオリエンタルな精神とも親和的であることは、改めて記憶されてよい。

今日、大日向雅美は、母子関係の臨床発達心理学的な研究成果、及び、実践活動を踏まえて、新たに母性から育児性という概念を構想し、新しい子育てと社会のあり方を論じている<sup>(46)</sup>。カーペンターは、新しい性と愛から教育のあり方を展開し、男性と女性の精神を包括する教育的な性の創造、教育における愛情（AFFECTION IN EDUCATION）、愛のある教育を構想した<sup>(47)</sup>。既に戦前期から山川は、このような原書の翻訳などを通し、子育てや母性に宿るとされる愛と性は、人間や社会の関係性に相対的であり、精神は多様な解釈可能性を孕むことを知悉していた。

こうした精神的な次元にも深い理解をすると同時に、山川は、リアリティのある働く女性や子育て、保育の分野に関する思想を形成していたのである。わが国の保育園の源流の一つは、「二葉保育園」であるが、「創立

(43) 野澤正子「養育とその社会的援助のあり方について（Ⅱ）－母性保護論争の再評価の試み－」『社会問題研究』第39巻第2号, pp.1-22, 1990.

(44) 吉田久一は、社会福祉の歴史的な評価を得られる理論とは、「留岡幸助『慈善問題』、井上友一『救済制度要義』、小河滋次郎『社会問題救恤十訓』、生江孝之『社会事業要綱』、海野孝徳『社会事業学原理』、大河内一男『我国に於ける社会事業の現在及び将来』、孝橋正一『社会事業の基本問題』、岡村重夫『社会福祉学（総論）』等にすぎない」（吉田久一『日本社会福祉理論史』勁草書房, p.3, 1995）と論じている。

(45) Carpenter, E. *The Intermediate Sex: A Study of Some Transitional Types of Men and Women*, 1908.  
(<http://www.fordham.edu/halsall/pwh/carpenter-is.html>)

(46) 関連する論考が提出されている（e.g. 大日向雅美「『母性／父性』から『育児性』へ」原ひろ子・館かおる編『母性から次世代育力へ－産み育てる社会のために』新曜社, pp.205-229, 1991）。

(47) Carpenter, *op.cit.*

者野口幽香から『二葉の大黒柱』と言われた後継者徳永恕<sup>(48)</sup>は山川と同窓でもあり親しく、後の回想として、徳永と二葉保育園に関して文章を残している。「半世紀以上も前の細民の子ときたら今日では想像もつかないほどひどい」<sup>(49)</sup>状況におかれる中、徳永が、「在学中から当時有名な細民街、四谷鮫が橋の二葉幼稚園に献身」<sup>(50)</sup>していると指摘し、「卒業後しばらく二葉幼稚園が私たちのクラブ」<sup>(51)</sup>であったと言葉を残している。

このような社会的精神的な思想の広がりやを有しながら、母性や子育ての思索を深化させる中において、「現在の社会が子供を親の所有物としてのみ見て、社会全体の後継者として考えず、したがって子供を養育する義務を親に一任して、あえてそれを分担しようとなしない」<sup>(52)</sup>と批評をおこない、「子供を養育し教育する任務は親に一任されて、子供は社会から直接何らの保護をも受けることができぬ」<sup>(53)</sup>と、働く女性に養育される子どもが、死に至ることもある状況を憂い、当時の状況を厳しく批判していたのである。これは、1926年の時点の発言で、山川が「捨児」の文章の中で論じた、子どもの尊厳を強く求める主張であった。

以上のように、働く女性と母性や子育ての思想史を鳥瞰すると、それは広がりを見せ、複雑に思想が相関し、多様性の中で系譜を形成して深みのあるものとなっている。そして、今日の社会福祉から思想史を展望しようとする時、政策的経済的なものが重要であることに加えて、welfareからwell-beingへの語が象徴するように、人間の深い生き方や尊厳性を問う、精神的心理的な次元も含む包括的な思想が希求されている。例えば、わが国の母性の思想史的な起源の一つである母性保護論争において、母親と子どもの生き方を深く真摯に見つめる思想を改めて再考し、どうすれば母と子がよりよい生（well-being）の方へ向えるのかという根本的な問いかけから再解釈していく余地は、いまだに多く残存していよう。

ここで求められるのは、かつて、吉田久一が社会福祉史を思考する際に述べた、「相対的独自性」<sup>(54)</sup>の視点、つまり、特定の考え方や方法に固執せず柔軟に異なる思想を解釈する相対的な感性と、本論の主題に従えば、子どもと母親の尊厳、人間のよりよい生を希求する独自の視点を養っていくことだろう。

(48) 二葉保育園「二葉保育園100年のあゆみ」([http://www.futaba-yuka.or.jp/main\\_site/history.html](http://www.futaba-yuka.or.jp/main_site/history.html))

二葉保育園と徳永恕については、次のものがある（e.g. 上笙一郎・山崎朋子『光ほのかなれども－二葉保育園と徳永恕』社会思想社、1995、松本園子「野口幽香と二葉幼稚園(I)－先行研究の検討－」『淑徳短期大学研究紀要』第46号、pp.117-129、2007）。

(49) 山川菊栄『山川菊栄集9』岩波書店、p.131、1982c。

(50) 同上

(51) 同上、p.133。

(52) 山川（1982a）, 前掲書、p.168。

(53) 同上

(54) 吉田（1995）, 前掲書、p.13。